

『殉教者たち』物語梗概

第一巻 詩人自身による叙事詩の主題の表明と、ミューズへの祈願。紀元 3 世紀末。場所はギリシア、メッセニア Messénie（ペロポネソス半島西端部）、ホメリダイ Homérides（ホメロスの後裔を自称する吟遊詩人）の末裔であるデモドクス Démodocus の娘・シモドセ Cymodocée は、ギリシア多神教の巫女である。ある日、野道に迷ったとき、泉のほとりでまどろんでいるウドール Eudore に会う。その様子は、さながら（ジロデの絵の）エンディミオンのようである。娘を送り届けてもらったデモドクスはシモドセとともに、ウドールの家族に礼をするため出発する。

第二巻 アルカディア Arcadie（ペロポネソス半島中部、牧人の理想郷）に到着したシモドセらは、ウドールと再会。そこでウドールの父ラストネーズ Lasthénès をはじめ一家がキリスト教徒であることが分かる。

第三巻 天上世界の描写の挿入。ここで、ウドールが殉教者として選ばれる。

第四巻 第二巻からの続き。デモドクスらを歓待するラストネーズ家の夕餉のあと、ウドールのこれまでの冒険の語り聞かせが始まる。ローマのギリシア侵入の折り、抵抗したラストネーズ家の跡取りであるウドールは、しきたりに従い、16 歳で人質としてローマに出発する。ディオクレティアヌス帝 Dioclétien の宮廷が描かれる。キリスト教徒迫害に指導的役割を果たすことになる副帝ガレリウス Galérius と、その気に入りでであるアカイア Achaïe（ペロポネソス半島北部）のプロコンスルであるヒエロクレス Hiéroclès と出会うが不和となる。ウドールはローマの都で若者にありがちな放蕩生活に陥り、キリスト教会から破門される。

第五巻 宮廷は夏の御所、ナポリへ。ウドールは若き仲間アウグスティヌス Augustin やヒエロニムス Jérôme と親交を深める。友と別れ、宮廷とともにローマに戻る。皇后と皇女がカタコンベでのキリスト教のミサに参加しているのを目撃する。ウドールは追放されて、コンスタンティウス Constance の軍隊へ流される。ウドールはライン河畔に到着し、フランク族と対峙するローマ軍のなかのガリア人部隊に一兵士として合流する。

第六巻 バタヴィア Batavie（ライン河口付近）へローマ軍は行軍し、フランク族との戦闘が始まる。フランク族の英雄たち、ファラモン Pharamond、クローディオ Clodion、メローヴィス Mérovée の紹介。ウドールは武勲をコンスタンティウスに認められて、ギリシア人部隊長に任命されるが、秋分の大潮を味方にしたフランク族の前にローマ軍は後退し、傷を負ったウドールは戦場に倒れる。

第七巻 フランク族の奴隷であったザッカリーZacharie に救われたウドールは、ファラモンの奴隷となる。キリスト教信者ザッカリーとの交流のなかで、ウドールは信仰を回復する。フランク族の間でもキリスト教が広まり始めている。狼からメローヴィスの命を救ったことでウドールは自由を与えられ、ローマ軍へ和平を提案する使者として出立する。

第八巻 ウドールの語りの中断（第四巻の現在時間へ戻る）。ウドールとシモドセは互いを意識し始める。地獄でのサタンたちの会議。

第九巻 ウドールの物語の再開。コンスタンティウスのもとへ戻ったウドールは、ブルターニュへ派遣され功績を認められ、アルモリカ Armorique 方面軍の指揮官となる。ドルイデスのヴェレダ Velléda と出会う。ウドールは語りを進めることをためらい、彼の気持ちを察した周りの男性たちはシモドセラ女性たちを下がらせる。

第十巻 信仰を回復していたウドールは、異教徒ヴェレダに惹かれる気持ちと自らを制する義務感との葛藤に苦しむ。結局、ヴェレダの愛の狂気に打ち負かされる。ガリア人たちは、ローマ軍指揮官によって自分たちのドルイデスが汚されたと信じこみ叛乱を起こそうとするが、ヴェレダの壮絶な自殺によって戦いは回避される。

第十一巻 ヴェレダを死なせた罪を悔いて、軍を離れたウドールは、エジプトのディオクレティアヌス帝に退役を願い出に行く。アレクサンドリア、ナイル河の旅。テーベ近郊の砂漠の独居修士 anachorète らの住まう洞窟 La Thébaïde でアントワーヌ Antoine に出会う。ウドールはギリシアの父の元に帰還する。ここでウドールの語りが終わる。

第十二巻 悪魔たちの陰謀。キリスト教徒の調査開始。ヒエロクレスはアカイアに発つ。ウドールとシモドセは愛情を持ち始める。

第十三巻 シモドセはウドールと結婚するため、キリスト教徒になることを父デモドクスに宣言する。デモドクスは当惑するが、ギリシア情勢も考え承諾する。シモドセに気があるヒエロクレスは嫉妬し、ウドールを皇帝に告発、シモドセは父とともにラケダイモン Lacédémone（スパルタの古代正式名称）に向かう。

第十四巻 スパルタを中心とするラコニア Laconie の描写。デモドクスらはラケダイモンの司教キュリロス Cyrille のもとに到着し、シモドセはキリスト教徒になるための教えを受ける。ヒエロクレスの追手が迫るが、ウドールはシモドセをレオニダースの墓の前で戦い救う。ウドールはローマへ召還の命を受けたため、シモドセはエルサレムへコンスタンティヌス Constantin

(=コンスタンティウスの息子)の母親の保護を受けるため、それぞれアテネから出航することになる。

第十五巻 シモドセには、ウドールの頼みでディオクレティアヌスの廷臣であると同時に高潔なキリスト教信者のドロテ **Dorothe** が同行する。シモドセとウドールの各々の出航。ウドールが到着したローマでは、元老院でキリスト教徒の運命が討議される。キリスト教徒代表・ウドール、ソフィスト代表・ヒエロクレス (=18世紀の啓蒙哲学者を想起させる)、ギリシア多神教の代表であるユピテルの神官・シマク **Symmaque**。

第十六巻 三者の演説。会議の結果、ディオクレティアヌス帝は躊躇しつつもキリスト教迫害勅令を認める。

第十七巻 シモドセの旅のつづき。エルサレムで聖週間を過ごす、ヒエロクレスがシモドセを手に入れるために百人隊長を出発させる。皇帝はキリスト教迫害令を正式に発布する。

第十八巻 ガレリウスはディオクレティアヌスを退位させ、自らが帝位に就く。ヒエロクレスは宰相となり、コンスタンティヌスはウドールに助けられて父コンスタンティウスのもとへ逃れる。本格的な迫害が行われ始める。シモドセはヒエロクレスの配下の手が伸びるエルサレムからドロテとともに脱出、ベツレヘムでヒエロニムスと出会う。

第十九巻 郷に戻ったデモドクスの苦悩。キリスト教迫害令を知った彼は、娘が連行されるであろうと思いローマへ向かう。シモドセはヨルダン川でドロテの立会いのもと、ヒエロニムスによって洗礼を受け、正式にキリスト教徒となる。ギリシアに向けて出航するが嵐にあい、イタリアに漂着する。

第二十巻 発見されたシモドセはローマに連行され、ヒエロクレスに陵辱されそうになるが、デモドクスとドロテが仕掛けた民衆暴動のおかげで魔の手を逃れ、キリスト教徒として牢に入る。シモドセをめぐるヒエロクレスのウドールに対する私怨が、帝国の安泰を害するものと判断され、ヒエロクレスは失脚する。

第二十一巻 ウドールは拷問に耐えることで指導者としての雰囲気をもとうようになる。

第二十二巻 ガレリウスとヒエロクレスは滅びの天使の一撃を受ける。ヒエロクレスはレプラにかかる。ウドールらの悲しみの日々。殉教を前にしたキリスト教徒らの晩餐。

第二十三巻 ヒエロクレスの死。シモドセは殉教の衣をまとい、決心を固めるが、牢から救い出

され、父と再会を果たす。

第二十四卷 詩人（シャトーブリアン）のミューズへの別れの言葉。 ガレリウスの発病（寄生虫によると思われる腸の壊疽）とその死。父を振り切りシモドセはコロッセウムに向かう。そこでウドールとシモドセの殉教が成就する。ミラノ勅令により皇帝となったコンスタンティヌスはキリスト教を公認する。